

# CARE World



国際協力NGO「CARE」は、1945年から100カ国以上で人道支援活動を実施してきた世界最大級の国際協力NGOです。日本事務局である当財団では、主にアジアやアフリカにおいて、災害時の人道支援を行うとともに、「女性や子ども」に焦点をあてた活動を通して、最も困難な状況にある人々の自立を支援しています。

## Contents

Page	1	CAREのジェンダーへのとりくみ
Page	2	外務省NGO研究会「ジェンダーとNGO」事業
Page	3	CARE ノルウェーのジェンダー事業
Page	4	アフガニスタン事業の中間報告
Page	5	スマイルギフトキャンペーン2013
Page	6	あつめて国際協力
Page	7	スタッフ紹介
Page	8	事務局報告・CAREストーリー

Vol. **25** ケア・インターナショナル ジャパン  
Newsletter  
Oct 2013

生きるチカラを信じて支える

## CAREのジェンダーへのとりくみ

CAREは、ジェンダー<sup>(注1)</sup>平等と女性のエンパワメントに長年にわたり取り組んでいます。制度としてジェンダー主流化に取り組むようになったのは最近のことです。その源流は、ジェンダーの意識が高い職員たちから始まった、ボトムアップの動きにあります。先進国のメンバー国の有志がケア・インターナショナル全体のジェンダー主流化を目指し、2007年にケア・インターナショナル・ジェンダー・ネットワーク(CIGN)を結成しました。この人々のつながりがCARE全体のジェンダーに関する方針を策定しました。この方針は2009年に「ジェンダー・平等・多様性ポリシー」としてケア・インターナショナル理事会(国際理事会)で採択され、ここからCAREのジェンダー主流化が正式に本格的に始まりました。

同ポリシーでは、総論が述べられており、各論は各国の事情を考慮して各事務所で決めていくことになっています。この方針に基づき、各事務所はそれぞれの方針やガイドラインを制定し、さらにジェンダー担当を選任あるいは兼任で配置することになりました。

日本では、2011年に「ジェンダーに関する方針」をとりまとめました。その中では、事業および組織、国内外におけるジェンダー主流化推進を基本方針と定めて、次のような方向性を示しています。

海外事業においては、事業形成時に必ず「ジェンダー分析」の実施とジェンダー視点に立った事業形成、②事業の全段階(計画・立案、モニタリング、評価)にジェンダー視点を含め、ジェンダー平等に貢献した成果の報告、③現地事務所職員のジェンダーにかかる能力向上のための技術的・財政的支援、④現地事務所のジェンダー・ポリシーの尊重とその実施への支援を行います。

また、組織・国内においては、①全役職員のジェンダーにかかる能力向上促進、②当方針実施にかかる予算の確保、③組織内の人材政策や各種規程におけるジェンダー平等推進、④支援者・ドナーへのジェンダー課題への理解促

進及び啓発活動の実施、⑤ジェンダーにかかる専門的知見や助言を得るために専門家との連携促進、⑥事業・組織におけるジェンダー平等推進にかかる成果の定期的報告、⑦当方針実施に係る組織的能力向上の内部査定と強化を行います。

CARE全体では事業面でのジェンダー主流化は進んでいますが、組織面ではまだまだ課題があります。先進国メンバー事務所の20%しかジェンダー・ポリシーを策定・実施していない、国内の法制度の枠内での方針に留める事務所が多い、人事評価や人材育成においてまだまだ改善する点が多い、男性職員の意識が十分に変わっていない、ということがあります。

これら課題を解決する取り組みとして、CARE職員を対象にトレーナー育成研修が進んでいます。研修を受けたトレーナーがどんどんと周りの職員を研修しています。また、国際理事へのジェンダー研修も計画されています。そして、今後は、グローバルレベルでジェンダー平等・多様性部署の設置が提案されています。今後もCAREはジェンダー平等と女性のエンパワメントを進めるリーディングNGOを目指していきます。

常務理事・事務局長 武田 勝彦



注1:ジェンダーとは、生物学的性別に対して、社会や文化的に形成されてきた性別(田中由美子「ジェンダーと開発」)。

ジェンダーの定義は概ね4つの側面から捉えられる。1)「社会的・文化的に創られた性・性別・性役割」であることの含意における「構築性」、2)性のダブルスタンダードなど性の「非対称性」の側面、3)優位・劣位関係を組み込んだ性別秩序の「階層性」の側面、4)人種、民族、宗教、年齢など「他の階層問題とジェンダーとの重層性」の側面にわたるもの(竹村和子「ジェンダー」、『若波 女性学事典』)。

# 外務省平成25年度NGO研究会 「ジェンダーとNGO」事業を開始しました

当財団は、外務省平成25年度NGO研究会「ジェンダーとNGO」を受託し、本年6月より、ジェンダー専門家らの協力を得ながら、国際協力NGOを対象としたジェンダー主流化に向けた能力強化と連携体制の強化事業を実施しています。

## 事業の背景

ジェンダーに基づく差別を是正し、ジェンダーの平等に取り組むことは、途上国における開発支援および緊急支援の効果を拡大し、(ポスト) MDGsを達成するためにも必要不可欠であると考えられています。そのためにはジェンダー視点に立った開発・緊急支援・環境政策と事業の運営、ジェンダー主流化にそった組織運営が重要だと認識されつつあります。

しかしながら、日本のNGOにおいては、ジェンダー主流化についての十分な知識、方法論の理解が不足しているのが現状です。今回、ジェンダー主流化の普及を通じて、各NGOの国外での活動における事業の実施効果拡大を図るべく、本事業を行うこととなりました。

## 事業目標

当研究会では、ジェンダー主流化に向けた能力強化と連携体制の強化を行い、その能力育成により日本のNGOがジェンダー主流化を理解し、実践できるようになることを目指しています。同研究会ではまた、首都圏の他に、能力強化の機会が少ない東海、関西、九州の関係者へのジェンダー主流化促進も試みる予定です。

## 主な活動

### 1. アンケート調査の実施

まずは各NGOのジェンダー主流化の現状を正確に把握し、ワークショップの内容を検討するため、協力団体などを通じて、対象とするNGOにインターネットによるアンケート調査を実施しました(結果は当財団HPよりご覧いただけます<http://www.careintjp.org/ジェンダーについてのアンケート結果.pdf>)。

### 2. ワークショップ

(東京、名古屋、大阪、福岡 各1回)の実施

ジェンダーに詳しい専門家および実務者を講師に招き、NGO実務者を対象としたワークショップを東京(7/18)、大阪(7/22)、福岡(8/24)、名古屋(10/12)で開催しました。

### 3. 事例セミナー (東京1回)の実施

「Men's Engagement - CARE ノルウェーがアフリカで実践した男性を巻き込んだジェンダー平等への取り組み事例紹介セミナー」と題して、CARE ノルウェーの先進的な取り組みを紹介しました(詳細は次ページをご参照ください)。

### 4. ハンドブックの作成

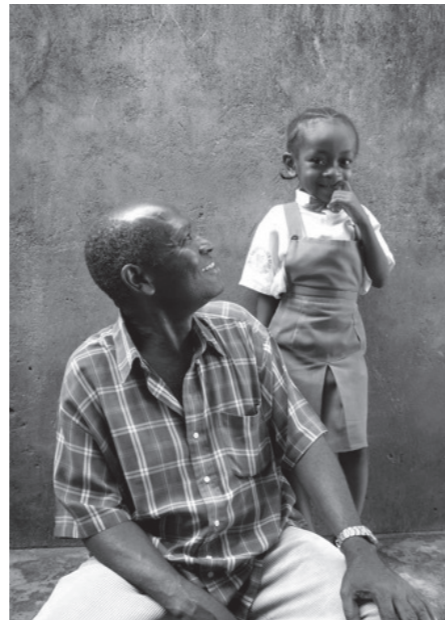
当研究会のワークショップでの講義内容および演習の結果をもとに、「ジェンダー主流化ハンドブック」を作成します(同ハンドブックには、NGOの実務者が事業の計画・実施・モニタリング・評価のサイクルにおいて参照できるよう、ジェンダー視点を事業の中に組み込む際の実用的なツールや事例を盛り込む予定です)。

### 5. 報告書の作成

ワークショップ、演習結果、各種リサーチをまとめた報告書を作成します(随時当財団HPにて公開しています)。



東京ワークショップでのチーム分けによる演習風景



ジェンダー平等への取り組みは男性の参画が欠かせません  
詳しくは次頁へ

## Men's Engagement

### 男性を巻き込んだジェンダー平等への取り組み事例紹介セミナーを開催しました

9月19日、JICA地球ひろばにおいて、CARE ノルウェーからプログラム・コーディネーター/ジェンダー担当のHilde Rorenを招へいし、同事務局がアフリカで実施した男性の参画を促す事業を紹介しました。ここではその概要をご紹介します。

### 男性を巻き込むジェンダー平等の始まり

これまでジェンダーの世界では、「女性」が議題の中心でしたが「女性と開発(Women in Development)」から「ジェンダーと開発(Gender and Development)」へ移行するとともに、「男性が問題の要であるならば、その問題解決には男性の参画も必要である」という考えが主流となってきています。過去においては、男性からはあたかも女性が男性から権力を奪い取り、コントロールされる側になるのではないかと不安や怒りの反応を示される、また女性や女性の活動は無視されるということが起きていました。これらの男性からの否定的な反応は女性や社会に悪い影響しか及ぼしていないという反省から、男性もジェンダー課題の解決に必要な要員として参画してもらうべきという考えのもと、ジェンダー主流化における男性の参画活動が始まりました。

この活動では、夫婦を基本とした研修を通して、お互いの家庭内や社会での役割分担を認識し、生活や関係向上のためにはどうお互いが変わるべきかを検討するための議論の場を設けたり、男性が恥ずかしがることなく集まれるクラブ、フォーラム、絆を深めるためのゲームやスポーツ活動、演劇を通じた交流などを実施しています。

### ルワンダの事例

ルワンダで実施されたワークショップの例を挙げると、夫婦がそれぞれの一日の役割を1時間毎にリストに書き出し、それをお互いに確認するという作業を行いました。その中で、夫の1日は仕事の時間に限られておりそれ以外には何もリストに書かれていない一方、妻は夫の仕事の前から食事の支度などの作業が始まり、夜まで家事が続き、夫よりも妻の方が拘束時間が長いことが明らかになりました。実際に妻の1日の作業を夫がやってみて、改めて女性の家事における負担の大きさに気づき、その後、家事を手伝うようになったという事例も紹介されました。

男性が家で家事分担などを行うことにより、女性が家庭の外で働く機会、時間が増え、収入が向上するなどの経済的利益が生み出され、それを実感することにより男性がより家庭内での家事分担等といった男女平等活動に積極的になるという結果が出ています。

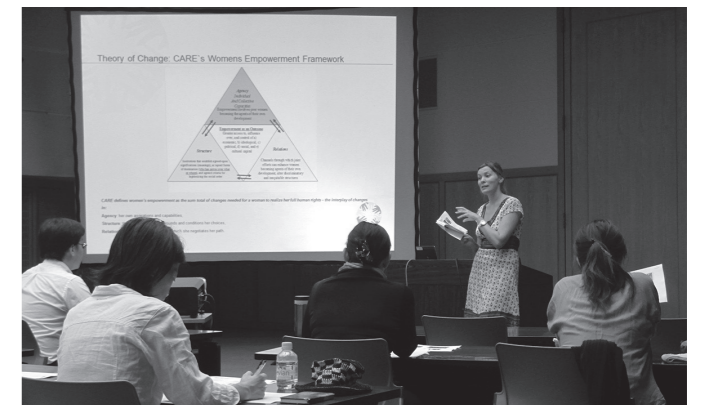


Rorenは、これまで英国の諸団体にてジェンダー関連業務に従事  
国際労働機関(ILO)の南アジア地域事務所とジュネーブ本部の各ジェンダー関連部署にも勤務

### マリの事例

その一方で、マリなどでは、女性の言動が社会文化的にかなり限られており、女性が家から出られる機会は水汲みに限られています。そのため水汲みは女性にとって単なる家事の一つだけでなく、他の女性との交流、情報交換できる唯一の機会でもあります。その水汲みを例えば男性が負担してしまった場合、女性が家庭の外へ出る唯一の機会を奪いかねないこととなります。このように、男女の役割分担を検討する際に気を付けなければならない項目があることも念頭に置く必要があることも触れられました。

最後に、活動の成果を見極めるのには時間がかかることが指摘されました。ルワンダの活動は週1回のワークショップを17週続けてやっと成果が出てくるかどうかという状況です。また、一度成果として出てきた変化を、どのように現地の人たちだけによる活動として定着化させるのかということも課題として挙げられました。



9/19のワークショップにて

## アフガニスタン 「遠隔農村地域におけるコミュニティ運営による初等教育事業」 中間報告

当財団は、2011年3月に本事業を5年間の計画で開始。事業の折り返しとなる節目に、本事業の担当である尾立素子プロジェクト・マネージャーに、改めて当財団がアフガニスタンで本事業を実施する意義やこれまでに見えてきた現地における変化、そして今後の課題についてききました。



教育を受けることは女の子たちの自信の向上につながっています



アフガニスタンのスタッフと打ち合わせする尾立PM

### Q アフガニスタンで初等教育の支援活動を行う意義は何ですか？

**A** 当財団は、女性と子どもの自立を促し、支援が届きにくい地域の人々を支援することを重視しています。アフガニスタンでは、子どもたち、特に女子は、タリバンの支配下にあった1990年代半ばから2001年までの間、学校へ行くことや教鞭をとることが禁じられ、公的な教育を受けることができませんでした。1990年の終わりまで、学校へ通えた女子は全体のわずか5%でした。これを踏まえ、アフガニスタンの中でも援助が届きにくい遠隔地域で学校に行くことができなかった子どもたち、特に女の子たちに対しても教育機会を確保するために、本事業を実施するに至りました。

### Q これまでの約2年半の活動を経て、事業対象地域で確認された変化は？

**A** 最も大きな変化は、女の子たちが変わってきたことです。この事業を開始した直後は、自分の考えが正しいのか自信がなく恥ずかしいので、教室の脇に席を確保したり、教師や職員に質問をされても、小さな声で返答する女子が多くいました。しかし今では、男子の隣の席・教室中央の席に座ったり、自分で手を挙げて発表する女子も増えていきます。学校に通うことで、授業での学び、教師・住民・本事業のスタッフとのコミュニケーション機会を得たことは、女の子たちの自信の向上につながったようです。

もう一点は、子どもの保護者が、この事業に対してより協力的になりました。事業開始直後は、保護者の中には、子どもが通学すると家事・農業を手伝う時間が減ってしまうため、学校に通わせてたくないという人たちもいました。今では、子どもが通学し、読み書き・計算・生活に役立つ知識を得て、家族の看病や、父親の商売の帳簿をつけるなど、家族の生活向上に役立っているため、全ての保護者が子どもの通学に賛成するようになりました。

### Q 本事業は5年間の計画ですが、残りの事業期間における課題は何ですか？

**A** 第一に、地域の人たちが、自分の子どものことだけでなく、地域社会全体のことを考え、より多くの子どもたちが学校に行けるように、NGO、国際機関、アフガニスタン政府等の関係者に対して学校の設置・教育の質の改善について住民の声を集めて要請を行うなど、地元の人たちの主体的な取り組みを促していくことです。

第二に、教育省と住民、CAREの間の良好な関係を保ち続け、連携をより強化していくことで、子どもたちへの教育が永続的なものになるように取り組むことです。具体的には、現在、CAREの事業活動として運営されている小さなコミュニティ運営の学校に代わり、公立学校が教育省によって建設される、そしてコミュニティ運営の学校の教員の給与が教育省から支払われるようになるというような形で、教育省がより深く関わっていけるように促す予定です。

当財団は、現在、アフガニスタンにおいて70のコミュニティ運営の学校を支援しています。事業が終了する2015年12月までに、22校の教育省への移譲と残り48校の運営を支えるための資金の調達を目指しています。

## つながる国際協力 「スマイルギフトキャンペーン2013」を開始しました



当財団は、2012年、東ティモールが独立10周年を迎えるにあたり「スマイルギフトキャンペーン」を開始。パイロット事業として開始した初年度は、多くの個人・法人の皆さまからのご支援を得て、農村部に住む710人の子どもたちに登校用のかばんと文房具のセットを届けました。その結果、支援を受け取った子どもたちの学習意欲は向上し、たくさんの笑顔と感謝の声を日本の支援者に届けることができました。

その一方で、現地事務所との事業評価においては、限定的な支援数（規模）ゆえ生じた、支援の公平性の問題、またモノを日本から届けることに対しては、支援の持続可能性等についても、課題を残す結果となりました。

これを受け、当財団は現地事務所とともに「より多くの人びとに持続可能なカタチで支援を届ける方法」について検討してきました。さらに、9月9日には「支援のあり方についてみんなで考えるワークショップ」を当財団事務所にて開催し、日本の支援者の皆さまからも貴重なご意見やアイデアをいただき、ともに支援のあり方を考える機会を持ちました。

多方面からいただいたご意見やアイデアを基に、「スマイルギフトキャンペーン2013」では、東ティモール事務所が2000年から発行・配布している東ティモール唯一のテトウン語による教育雑誌「ラファエック」の出版・印刷、および22,000世帯への配布を支援することになりました。

同国は15世紀から450年もの間、外国の支配下におかれていたため、教育は長年支配国の言語によって行われてきました。独立後、ローカル言語のテトウン語が公用語となりましたが、未だに教科書はもとよりテトウン語の出版物がほとんどありません。このような状況で「ラファエック」は、皆が理解できる言語「テトウン語」で、計算や識字練習、農業や保健に関する情報など生きる上で必要な情報が掲載され、子どもたちのみならず広く一般市民にも愛される教育・生活実用書となっています。

当財団は本年も日本の支援者と東ティモールをつなぎ、より多くの笑顔に出会うため、本キャンペーンを実施します。キャンペーンへのご支援とご協力を心からお願い申し上げます。

当財団 HP (<http://www.careintjp.org/membership/campaign/03.html>) より、参加申込みいただけます。



「ラファエック」とはテトウン語でワニの意。ティモール島はワニからできた島だと言われ、ワニは神聖な動物とされています



力強く、穏やかな瞳、日々、命

(CARE x 佐藤慧 フォトギャラリーより)

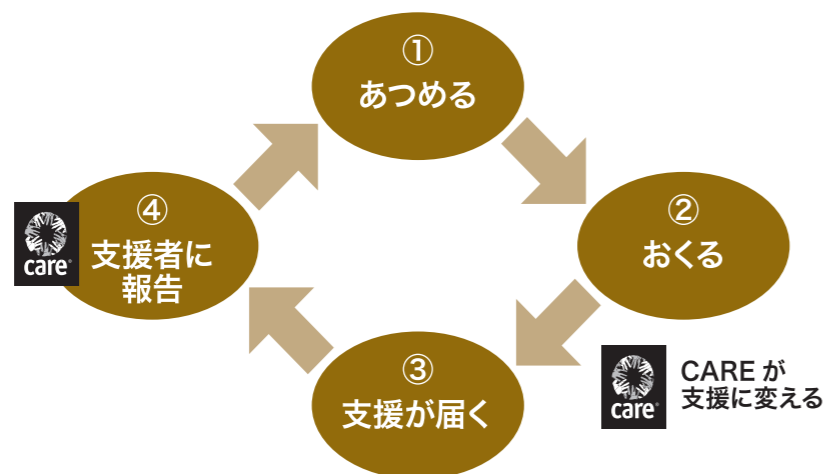


子ども向け「ラファエック」を抱える女子生徒

# 「あつめて国際協力」を始めました

## 使わなくなったモノが、女性や子どもたちの自立支援に役立ちます

ご自宅、学校やオフィスなどでねむっている本や使わなかった切手やはがきを集めて送っていただくだけで国際協力につながります。集まったモノは、換金され、途上国の女性と子どもたちの自立支援に還元されます。



### 集めているもの

- ・はがき (未使用、書き損じ)
- ・切手 (未使用、使用済み)
- ・商品券、トレーディングカード
- ・本、DVD、CD、ゲーム機、ゲーム
- ・ソフト外貨 (紙幣、コイン)



### 例えば、はがきや切手でできること…



注：当財団は支援している70校全てに各1台のろ過機を設置することを目指しています。現在、ろ過機がないため、子どもたちは安全な水を確保するために遠距離を歩いて水汲みに行かねばならず、そのために本来は勉強に充てるべき時間が割かれています。

### モノの送付先

これから年末にかけて出てきた書き損じはがき等をぜひ下記までお送りください。当財団が支援に換えて、途上国の女性や子どもたちに届けます。

公益財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン  
「あつめて国際協力」係  
〒171-0031 東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階  
Tel: 03-5950-1335 Fax: 03-5950-1375 Email: atsumete@careintjp.org



009  
財務・総務部  
部長  
八木澤ひろこ

「赤毛のアン」「大草原の小さな家」「あしながおじさん」。私の子どもの頃の愛読書です。パンプキンパイや七面鳥の丸焼き、暖炉の火で炙った豚のしっぽを夢み、人参のジュースを入れたバター作りなどに、見たことのない外国文化が憧れでした。

大学の時、父の仕事の関係でフィリピンに1年間留学しました。留学生寮で生活し、ルームメイトはポルトガル系香港人とタイ人。寮のカルチュラル・ナイトでは、それぞれの国を紹介する歌や踊りに寸劇の披露、オープンハウスでは各国の料理の紹介。韓国人留学生から韓国語を習い、イラン人留学生からコーランをもらい、ネパール人留学生からカレーの作り方を教わりました。これら交流を通じ、特にアジアの多様性や文化・人間の魅力を知り、欧米中心であった価値観を見直すきっかけとなりました。帰国後、日本YWCAにおいてアジアの留学生との交流グループに参加し、アジア料理を紹介する料理教室を主催、夏には留学生とのキャンプの実施など、その企画・運営にも携わり、NGOの活動にも興味を持つようになりました。

その後、アメリカの大学院で教育の観点から開発学を学び、NGO活動の中心であるワシントンDCで国際交流団体に就職しました。資金集め、印刷物の編集、ウェブサイトの管理など、小規模ながらNGO運営を全般にわたって経験しました。その中でも特に、NGOの効率性や資金管理に疑問を持ち、経理について勉強するため働きながら大学に通い、CPAの資格を取得しました。CPA取得後、NGOを主な顧客とする会計事務所に移り、アウトソーシング・グループで国際協力団体から教会まで様々な形態の顧客の経理・財務を担当しました。顧客との信頼関係を大切にしながら、それぞれのニーズに応じたサービスを提供し、NGOに関する経理の知識と経験を深めました。

東日本大地震を契機に家族の近くで過ごしたいと日本に帰国し、ご縁があってCAREの一員となりました。CAREでは昨年統一会計システムを導入し、会計分野でもグローバル化が求められています。日本の独特な会計・税務などの知識を習得しつつ、これまでのアメリカでの経験と知識を活かしていければと思っています。

## 私スタイルの CAREライフ

育児をしながらボランティア  
松井 美奈子



3歳のお嬢さんと松井さん

私とCAREとの出会いは2012年12月にCAREのオフィスで開催された「趣味を活かした国際貢献～チャリティ手芸ワークショップ」でした。国際協力やボランティアにはずっと興味があったものの、今まで機会がありませんでした。しかし、このイベントは自宅から近くだったこともあり気軽に参加してみました。参加してみると、手芸の講師の方も、CAREのスタッフも暖かく、とても楽しい時間を持てました。このように気軽に参加できるのはいいな、CAREっていいなと思いました。

現在、小さい子どもがおり、毎日通ったり、遠くに行ったりはできません。でも何か始めたいと思い、事務局ボランティアに早速登録しました。簡単な作業を数時間お手伝いするのですが、ほんの少しだけれど、これが誰かの役に立っているのだらうなと嬉しく思いました。そして「手芸ワークショップをもう一度やってみましょう！私、お友達を誘いますから」と言ってみたら、是非！とのことで2013年3月に2回目を開催しました。その時は子育て中のお母さん方にも来ていただきたいので、キッズスペースを作ればどうでしょうかとご提案し、自宅からマットや子どものおもちゃを持ってきて簡易的なキッズスペースを作りました。当日は、3名の子どもたちがそこで遊びながらお母さん方の手芸の時間を楽しく待ってくれました。

そして次第に、私もCAREのような団体にボランティアとして参加するとともに、寄付をしていく側にもなりたいと強く思うようになりました。同じく5月に目白・雑司ヶ谷を中心に親子イベントやママのための習い事を企画・運営するサロン・ド・マルリーを立ち上げました。そしてここでの収益の一部をCAREに寄付することを決めました。

私の最初の出会だった手芸ワークショップと同じ、「自分の楽しみが、誰かのためになる」をコンセプトに…。CAREと出会って本当に良かったと思っています。私のように子育て中の方もおられるかと思いますが、ほんの少しあいた時間に、ボランティアに参加することは一つのとても良い時間の過ごし方だと思っています。

# CAREストーリー

10月11日は国連が定めた「国際ガールズ・デー」でした。2012年10月、女子教育の必要性を主張し、銃撃されたパキスタンのマララ・ユスフザイさんの事件をきっかけに、世界中で女の子の権利とエンパワメントへの関心が高まっています。

ここでは、シリアから隣国ヨルダンに逃れたハナちゃんの絵を紹介します。右の絵は、8歳の女の子が描く一般的な絵に見えますが、よく見ると中央に戦車、左右の上に丸いものが描かれています。この丸いものは、ハナちゃんによると目とのこと。

ハナちゃんのお父さんは、道端で

野菜の行商をしている際に爆撃に遭い亡くなりました。弟は家に爆破物が飛んできた際の衝撃でけがをしました。父親を失った一家は、現在、ヨルダンの首都アンマンのスラム街で生活をしており、母親は合法的に働くことができません。ヨルダンでは難民の子どもたちも無料で学校に通うことができますが、現在、難民の数が急増しており、全ての子どもを受け入れることができず、ハナちゃんも例外ではありません。9月から始まった新学期にハナちゃんは学校に行くことはできませんでした。ハナちゃんは言います「右側の目は私の目で泣いているの」と。



シリア難民の子どもたちは学校に行けても紙や鉛筆を買うことができません



この1年間ハナちゃんは学校に通っていません

## 事務局からの報告

### 当財団設立25周年記念行事を開催しました

2013年6月29日、「自分スタイルの国際協力」の探し方～トーク&Jazz Liveな午後」を開催しました。この四半世紀の間、日本における「支援」の意識や価値観、国際協力への関わり方は大きく変わりました。多様化しつつある「新しい支援のカタチ」をテーマに、活発な議論がなされ、その後はジャズバンドのチャリティ・ライブを楽しみました。

次の25年も「生きるチカラを信じて支える」CAREであり続けたいと思っております。これからも継続したご支援を、よろしくお願いたします。

### 「ケア・サポーターズクラブ千葉」が設立されました

2013年7月1日、CARE支援組織として、「ケア・サポーターズクラブ千葉」が設立。9月17日には設立総会が、そして10月12日には設立記念行事が、ともに千葉市内にて開催されました。設立にあたり、長きに亘りご尽力いただきました皆さまに、心より御礼を申し上げます。現在、当財団公認の支援組織7組織(岡山・東京・長野・大分・熊本・金沢・千葉)が、それぞれの地域にてチャリティバザーや講演会等を実施。会費に加えて、イベント等収益の一部を、アフガニスタン事業や緊急支援を含む当財団の活動にご寄付いただいております。



「仕事とボランティアの両立」という視点からパネリストとして参加した神裕子が個人寄付担当として10月に入局しました(右から二人目)

### シリア緊急募金を開始しました

今なおシリア難民の数は増え続けており、人口の1割を突破しました。その数は1日あたり約5,000人(約20秒に1人の割合)とされ、12月末までには350万人にも及ぶと想定されています。これからシリアとその周辺国は厳しい冬を迎える中、これまで以上に国際支援(活動資金)が求められています。当財団HPで「シリア緊急募金」(クレジットカードがご利用いただけます <https://www.careintjp.org/donate/>)を受け付けています。皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

個人支援者専用ダイヤル



TEL: 03-5944-9931